魚、綿織物等は総括名称であり、坑木、床板等は用途名であり、味の素は商品名であるが、等級適用上これらはすべて貨物の名称を用いた品目として取扱われる。貨物等級表に品目を分類するに当たっては、第1に特殊なものおよび数量の多いものを抽出し、残余のものは「その他」としてまとめるような方法をとっているが、このようにして抽出された品目の多くが「貨物の名称」を用いているので、一般貨物においてはこれを第1順位にしている。

等級表は貨物の本質と用途をおもな基準として品目分類を行っているが、「エ」の罫の印をつけた品類とは用途を基準にして分類した品類すなわち**用途名の品類**である。もっとも薪炭類のように用途を基準とした品類でも、この品類中の品目がすべて「貨物の名称」を用いた品目に該当するようなものについては罫の印をつけていない。

2 混作品の等級

混作品とは2種以上の材料で作られた貨物のことで、化合物を指すものではない。したがって各材料は製作前の状態にあるかまたはその成分を持っているものである。

混作品で製作材料によって適用品目が異なるときはとくに明記したものを除き、その材料中最も大きい部分を占めるもので作られた製品の属する品目による。ただし大小の判定が困難なときは各材料で作られた製品の属する品目のうち、最も高い等級のものによる。大小の判定は原則として重量を基準にするが、容積・機能・用途等を参照して常識的に判断することになっている。

3 不組立のもの等級

組立てないものまたは分解したもので、その全部を取りそろえたものは、とくに明記していないかぎり組立てたものと見なす。組立てないもので、その全部を取りそろえたものは全部の部分品がそろっていて、この部分品を組立てることによって1個の完成品となるものをいい、分解したものと完成品を適当な部分部分に解体したものをいう。組立てて運送するといちじしく容積または重量が大きくなるもの、あるいは破損しやすいもの等は通例この状態で託送される。貨物等級は価格をおもな要素として格付けされているが、貨物の価格は組立・不組立によって大差はないので、とくに明記したものを除いて、原則として不組立のものも組立てたものと見なして取扱うことにしている。ただし品類番号36 鉄道と電路用品中の品目は、その全部をそろえなくとも組立てたものと見なす。

4 部分品の等級

部分品とは完成品の組成に必要な要素で、部分品として完成し、そのまま組立てに用いることのできる状態のものをいい、それ自身独立しての効用はないが、ほかの部分品とともに組立てて初めて完成品の機能を助けるものである。

部分品は貨物の名称を用いた品目のあるものはその品目に、その他はとくに明記していないかぎりその材料で作られた製品の属する品目による。

貨物の名称を用いた品目は、それが独立した効用をもった場合と部分品として使用される場合とで、一般的には等級格付けの要素が極端に相違しないので、部分品に対しても適用方第1号の趣旨にしたがってまずこの品目による。部分品として常時運送されるものに対しては貨物の名称を用いた品目として、あるいはとくに明記して適用方を明らかにしているが、残余のものについてまで等級を定めることは煩雑であるので、これらはその材料で作られた製品の属する品目によることにしている。

5 該当品目のない貨物の等級

貨物等級表上該当品目のない貨物の等級は5級である。鉄道で運送される総貨物の加重平均1t当り価格が5級に相当するので、該当品目のない貨物の等級は5級にしている。

6 2品目以上混載の場合の等級

2品目以上混載した場合には各品目ごとの重量監査が困難なものが多くことと、計算が非常に複雑になるなどの関係からもっとも高い等級によることになっている。ただし鮮魚または冷凍魚の下級および上級を混載した場合、下級のものが上級のものの数量より多いときには「混載」の品目を適用する。

7 付属品の等級

付属品とは従物のことで、ある物の所有者が、その物の常用に供するため、自己の所有に属する他の物をこれに付属させたとき、これを従物といい、ある物を主物という。主物と付属品とは各独立の物であるが、付属品は主物に付随して初めて本来の効用を表わすか、または主物の経済上の効用を補完するものである。

従物の等級適用に当たっては、主物と付属品を1口とした場合には**主物の等級**によることになっている。

8 雑品の等級

危険品、貴重品および汚い品以外の貨物を1こん包中に2種以上混入したときは、荷送人の請求によって品名を「雑品」とし、等級を1級として取扱うことができる。

9 特別等級の適用

貨物等級表のうち、同一品目につき普通等級と特別等級の表示のあるものについては特別等級を適用する。全然適用されることのない普通等級を併記しているのは、等級表の利用者および荷主の等級査定の経緯理解に資するためである。→貨物等級。(片山伊与吉)

かもつとうきゅうひょうのへんせい 貨物等級表の編成

貨物等級表は鉄道運送の対象となるあらゆる貨物に対して、もっとも合理的な等級および減トン数ならびに小口貨物率率に対する割増および特別を決定し、これを品目として分類することと、この品目を索引に便利なように配列することによって編成される。

1 例示主義と列記主義 等級表に掲記された貨物の名称を品目といい、品目掲記の方法に例示主義と列記主義とがある。例示主義は代表的な貨物を例として掲げ、その他のものは類推解釈して等級を適用するものである。列記主義は必要な品目をすべて掲記し、その範囲を厳密に規定して類推解釈を禁ずるためになっっている。現行のものは後者の方法によっている。

2 品目の配列方法 等級表に品目を分類・配列するに当たっては、それぞれの観点からつぎのような方法がある。

(1) 本質から 動・植・鉱物。固体・液体・気体等。生鮮・冷凍・塩乾・缶(かん)詰等。金属・非金属。有機・無機。重量品・容積品(かさ高品) (2) 生産業態から 鉱・林・農・畜・水・工産品 (3) 加工の程度から 原料品・半製品・精製品 (4) 配給業態から 金物・荒物・薪炭等 (5) 消費関係から 衣・食・住・燃料。消耗品・原材料品・使用品。必需品・嗜好品・ぜい沢品。

現行制度においてはまず類型の品目を集めて品類とし、全品類を危険品と普通品に2大別し、普通品に属する品類をさらに11の産業部門別に分類している。

品類および品類中の品目の配列は原料品から製品へ、代表的なものまたは特殊なものから一般的なものへおよぼすようにしている。

現在の品類数は76、品目数は1,297である。→貨物等級査